



深町の歴史 (最終回)

太郎谷バイパス開通

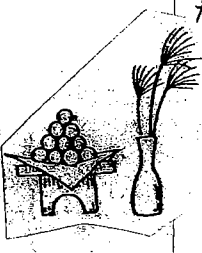
高崎壽郎

平成七(一九九五年)八月二十九日午後三時、快晴のもと太郎谷バイパスは開通した。

深町としては、このバイパスの開通で、眼前が急に明るくなったような僻地的存在からの脱である。以前、学校や職場で住所をかかれ、「深」と答えると、「ふかあ」と、いかにも人里離れた山奥へでも入り込んだようにいわれた経験のある人は多いと思う。又、「田舎っぺ」「深のド百姓」「山猿」など言葉のいじめを受け、暗い気持ちになった者。「大きくなったら深には絶対住まない」と決心された方もあるとき。

バイパスが完成近くになると、深町に変化がみえだした。世帯数は三百を超え人口も千人を突破する勢い。小学校は転入生がきだし、幼稚園も園児増で、二人の先生になった。如水館高校が深町へ移転してきた。

町のいろいろな行事に参加する人が多くなった。行政的にも以前より陽が当たり出した。



の翌年からは、教材を兼ねて全校行事となりました。

・旧道に比べ、距離が約三百m、所要時間も目にみえて短縮された。
・以前と比べ安心して運転でき、デメリットとしては、
・交通量が増大し、事故の発生が心配。
・バイパス部分は山陰になり、雪や凍結に弱い。
・周辺が乱開発に巻き込まれる恐れもある。
などが、一般的である。

校舎と共に (九)

稲刈りとおにぎり

石井哲代

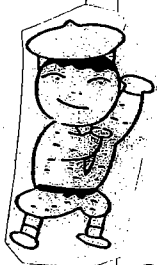
稲の一生について、
稲の苗を、一本植え、二本植え、三本、四本、五本、十本、二十本植えと区別して植え、その生育状態と、稲の数と重さ、浅植え、深植えの根の張り方と、稲との関係等を実際に田を借りて実験した記録研究の表題です。その年の県小学校科学研究会で、銅賞を頂いた筈です。五年生の理科教材だったので。そ

近所の田を借りての全校田植えは、画期的な学校行事としてN.H.Kテレビで照会されました。まだテレビは全戸に普及していないので近所の家でまだかまだかと、全町挙げて見たものでした。各新聞にも写真付きで大きく照会されたものです。稲刈りも全校で取り組み、これも毎年新聞で照会されたものです。刈るのは全員ですが、てねる(くる)のは高学年、薬の持ち方、力の入れ具合、ねじり方、根本の揃え方等、家での手伝いが、ものをいいます。次は「はで干し」、稲小屋は田主さんがおこして下さったのでしようか、下級生はほとんど運ぶ人、五、六年生は家でするように稲を分けてかけます。思い思いにかけるのですから、まるでむかでを干したようではあります。一段落。もうその頃には、川で手を洗った子たちは、彼岸花の咲く土手へと急ぐのです。全校児童百余人が、ずらりと並んで、おかあさん達が炊き出して、にぎって下さった大きなおむすびを競争で頂いたものです。小さな手に余るようなおにぎりを、二つも三つも持って、顔中を口にしたようにして頬張っていたあの顔。亦、舟精込めて漬けられた奈

そして、バイパス開通で深が市街地からも短時間で行ける豊かな自然が残った町であることが、だんだん周囲の人々から認識された。深町を見直し始めたといってもよい。

最近、「山陽自動車道尾道インター」はどういったらよいか「如水館高校はどこ」などよくきかれるが、ふれあいの絶好のチャンスであり、ていねいに対応することが肝心である。太郎谷バイパスを機会に、町民には今まで以上に住み心地の良い「人にやさしい町づくり」を、訪問者、通過する人には爽やかな感じをさせる町、人情厚い町づくりを目指していきたいものである。待望のバイパスは開通した。深町の前途は明るい。さあ、希望を持って二一世紀向かって翔こう。(完)

秋祭りのお知らせ



本年も、家内安全・五穀豊穡を祝って、左記の通り秋祭りを開催致しますので、おさそいあわせご参詣下さいますようお願い致します。

- 一、日時 十月十九日(土) 午後六時
- 二、場所 千川神社
- 三、内容 祭典と演芸大会

千川神社 同

良漬けの、これ又美味しかったこと、今思っても唾が出るようです。それにしても子ども達の為とはいえ、忙しい秋の一日をこの事にかけて下さっていた町の人々の真心と献身と協力、誠に誠にありがとうございます。二十数年経った今も「ありがたかった」としみじみ思うので

余録
ひと秋、こんなことがありました。陸上記録会で、三原小学校へ行ったら、雲って雨が降りそうになりました。稲小屋が濡れるといけん」というのが深行きバスがない。中之町行きに乗り別所降りて峠の道を走り走り越えて無事稲を入れたことが。後日足踏脱穀機で稲こぎをして、痒くてかゆくて、とうとう後の作業は近所のかたへお願いしてしまっただけです。改め重ねてお礼申します。



いらっしやいませ

大西隆義様 東峰 八月

町内行事予定

- ◆小学校(幼)
- ◆解放講座 五日
- ◆人権参観日 上 映学習会及び家庭教育学級 一八日
- ◆城山登り 一九日
- ◆誕生会(幼)やきいも会食

- ◆女性会
- ◆親睦会 上・二五日 中・五日 下・四日

おれとお願い

町内会連合会

連合会の三大大行事の中、盆行事・町内運動会の二つはみなさんのご協力で盛大裏に終わることができました。両行事とも天候に恵まれ、たくさんの方の参加有難うございました。残る一つ、毎年十月十日に行はれる市民体育大会、昨年は一八〇人の参加観戦がありました。今年も国体開催で十月二十七日と決定しました。たくさんのおいでを願っています。詳細は後程お知らせします。

深町の人と世帯の動き (八月)

区分	九六年	平成五年	増加
人口	九七七	八九六	八一
世帯	三二一	二八九	三二

四十年ちかく県立高等学校で教鞭を執った元校長が、「君、人情紙のごとくだね。今年度の年賀状は三分の一に減ったよ」と、十二年前の新聞スクラップ(交遊抄)に「肩書捨て残るもの」と題し、福島県文化センター館長氏の書いた一文である。交遊が、書かない私の周囲にも、現役時の肩書を捨て切れぬ人が何人かある。かつての肩書が通用しない一般社会では「ただの人」にすぎぬ。統一して館長氏に「私の知るB氏は、著名な役職を退いて今は枯淡の生活にあるが、いまだに人の出入りの絶えさかの利害も生ぐささもない。B氏は肩書でなく、そのあふれるような人間的魅力がいつまでも交遊者を」。生きている世界、生きた世界は各々異なる自分が生きた世界の価値観がどこでも通用するとは限らぬ。通用させようとするのが、政治家、官界の住人である。空出張による億単位の裏金づくり。報道される不明確な政治家の会計。一般人には通用しない世界である。